

浜松文芸館主催 秋の講座満載！直虎企画展 好評開催中！

お彼岸を迎え暑さも一段落しました。それでも日中の日ざしはなかなか暑く、半袖がいいか、いや、もう秋なので長袖にしようか、とあれこれ悩みながら羽織り物を1枚用意する今日この頃です。



お彼岸と言えば、毎年不思議に思うのは、この時季に合わせたごとくぴったりと咲く彼岸花。土手一面に咲き誇る真っ赤な彼岸花に目を奪われるのも秋の風物詩の一つでしょうか。さて、浜松文芸館にも秋がやって参りました。文芸の秋にふさわしく、文学・俳句・文学と歴史・文章教室・自由律俳句と色とりどりの文芸の花咲く浜松文芸館です。これらの講座を通して学びが更に深まり広がっていくことを願います。

8月から始まった「企画展・レディサムライ直虎」。寺野編と伊平編の漫画が冊子になりました。これで直虎漫画の3部作にあと川名編ができれば4部作完成となります。10月中旬には、この川名編漫画が本館の展示室にお目見えします。どんな物語なのでしょう。川名は、直虎公の曾祖父直平ゆかりの地でもあります。川名の福満寺には、直虎公が寄贈した鐘があったといわれています。江川直美氏の漫画と柴田宏祐氏の文による「川名編物語」を、楽しみにお待ちください。



☆一冊 100 円好評販売中

**館長のひとり言・・・車中にてあれこれ**

通勤に遠州鉄道を利用しています。通称赤電も、この頃は、青電あり、家康公直虎公バージョンあり。私たちの目を楽しませてくれています。特に、今話題の直虎ちゃんのイラスト電車はまあ鮮やかで可愛らしいこと！車体のみならず車中の床にも見事に描かれていて、踏むのは恐れ多く、そっと足を運びながら乗り降りしています。さて、さて、私の車中での楽しみにしていることを二つ。一つは、読書です。車内に乗り込んだら、空いている座席に直行し座るやいなや本を開きます。往復40分の読書タイムは、私にとってまさに至福のひと時。本の世界にどっぷり浸りきっている自分がどんな顔しているのか、それは棚に上げておいて、周りを見渡すと・・・。車中での人間ウォッチングももう一つの楽しみです。(少々不謹慎で申し訳ありません)。圧倒的に多いのは携帯電話の画面とにらめっこしている人。時に、お子さんが一生懸命話しかけているのにしらんふりのママも。お子さんととのひと時、もったいないですね。それでも、この頃、膝に本を広げている方も増えてきました。まさに読書の秋です。眠っている、いや、瞑想にふけている方もよく見かけます。時折気持ちよさそうに大きなあくび。ちょっと手で覆うとスマートなのですが余計なお世話かな。だいぶ少なくなりましたが、メイク中の女性も。あっという間に変身する姿に恥も外聞も越えて見とれてしまいます。車中の人々にも様々な人生あり。私に才能があればとびきりの物語を紡ぐのに、ああ、残念。

浜松文学紀行 湖畔の詩人 清水みのる 4

誰もが認める 餓鬼大将

浜松文芸館講演会 講師 和久田 雅之

ラムネ（「溺れさせる」の方言）を兄に飲まそうとしていた上級生を水の中に思い切り押し込んで仕返しをしたみのるは、翌日担任に怒鳴りつけられ、「井戸に飛び込んで人の痛みを知れ！」と迫られた。なぜ叱られるのか、その理不尽さが悔しくて、涙を流しながら裸になって深さ3尺ほどの井戸に飛び込んだ。その冷たい水の中で彼は、思い切り大声をはり上げて泣き叫んだ。

その頃、私の二人の姉は同じ学校の先生をしていた。誰かの知らせにその姉たちも駆けつけて、受持ち先生に詫びたらしかった。そして出て来いと言う先生達の声にも、いつかな動かなかった私は梯子で引きづり出され、恐るべき粗暴なる少年という極印を押されて、その日は夕方まで教室の隅に佇たたされてしまったのである。（「思い出の記」）

この事件がきっかけで、やんちゃ坊主みのるは「恐るべき粗暴少年」のレッテルを張られてしまった。その後、みのるのいたずらは益々エスカレートしたようで、後年成人した彼に、姉たちはよく「教員室に呼び出される生徒の中に、みのるの居ないことは一度もなかった」と言った。昭和56年（1981）当時78歳だったみのるの同級生日山規矩治さんの次の話は、当時の様子をよく伝えている。

当時お医者さんは「お医者様」と呼ばれ、一般市民とは遠くかけ離れた特別の存在でした。だからその家族も、坊ちゃん、お嬢さんと呼んであが崇めていました。近所の人たちはみのるさんのことを小さい坊やという意味で「チー坊」と呼んでいたようです。子供らはそのうちいたずら半分に「チン坊」と呼ぶようになりました。たいへん気位が高く、伸び伸びとした性格で自由気まま、わんぱく少年で伊左地の番長的存在でした。私は小学校へ入ってから知り合ったのですが、悪さ小僧の一方の旗頭で、毎日のように職員室に呼び出されて先生に叱られていました。当時お姉さん二人が先生をしていたので、家へ帰ってお母さんにそれが伝わりまた叱られたとよく愚痴っていました。

その頃、古人見方面から来る道は、今の伊佐見公民館と体育館の辺に道が通っていました。学校前には自転車では通れない太鼓橋がかかり、田んぼ側の土手には一面すすきが茂っていました。川の水も水量が豊富で、舟が荷物を積んで自由に出入り出来、床屋さんの所まで入っていました。

喧嘩する時、みんなから「チンボウ、チンボウ」と言われるの癪で名前を変えてくれと母に頼んだこともあるという。現在この辺りは大幅に埋め立てられ、道路ができ当時の面影を探すのに苦労するが、太鼓橋や伊左地川周辺にわずかに昔の名残が感じられる。後年彼は母校の校歌を作詞、発表会の当日に学童たちの前で少年時代の思い出を語ったが、語る「自分の言葉の調子に、いつとは知れず胸をつまらせていた」と書いている。